

大学からの AP へのフィードバック—ブラウン大学の場合

Feedback for AP from Brown University

ジャクソン祐子(ブラウン大学)

Yuko Jackson (Brown University)

1. はじめに

高校で日本語を学習し、引き続き本校で日本語のプレースメント・テストを受ける学生数はこの数年平均して20人ほどである。日本語のコースを取っている学生の総数が平均110人ほどなので、継承学習者、あるいは何らかの日本語学習経験があるか学生の占める割合は2割弱である。本校では継承学習者は小数で、高校で日本語を学習し、引き続き大学で勉強を希望する学生がほとんどである。この中で、3年のレベルにクラス分けされる学生は稀であり、2年生のレベルである中級コースに入ることができる学生は、年により異なるが、プレースメント・テストを受ける学生の20%から25%ぐらいである。大多数は **advanced beginner** レベル、もしくは初級コースに振り分けられる。中にはプレースメント・テストの結果次第では日本語を取らない学生もいるのが現状だ。同じ3年間なり、4年間なり勉強していても学生間の能力の差は大きいと言える。これには個人的な要因と高校での日本語のプログラムの状況に起因していると考えられる。

今年3度目の **AP exam** が行われ、来学年度に **AP exam** を受けた学生が入学してくることは、ほぼ確実である。高校で頑張って4年生まで日本語を勉強してきた学生を大学でさらに伸ばしていける態勢を整えていくことは当然ながら大学で日本語教育に携わる我々の重要な課題である。今回の学会の趣旨は **AP** 並びに **articulation** の問題点と今後の課題であるが、本稿では高校側と大学側の相互理解を深めるという最も基本的なステップから縦の **articulation** の今後の課題を考えて行きたいと思う。

2. 大学側からのフィードバック

AP コースの教科課程と、期待される学生の言語能力、並びに日本の文化知識のレベルを受け入れ側である大学が理解することは、勿論非常に大切である。ある高校の先生は、教え子が大学でどのレベルの授業に入り、どの程度の力が発揮できているかなど知ることがないと話されていたのだが、高校側でも大学がクラス振り分けの際どのような言語能力を期待しているか、高校と大学の授業や

クラスのダイナミクスの違いは何か、そして、卒業生の大学でのパフォーマンスを知ることにも同等に重要であると考え。また、学生の高校と大学での経験に基づいた意見を高校、大学側ともに参考にして行くべきであろう。双方の理解を深め、状況把握に欠かせないのが、フィードバックである。よって、本稿では学習者並びに受け入れ側である大学からのフィードバックを紹介し、その結果を通して、縦の articulation に言及する。

2.1 フィードバック採集方法

2008-2009年度に初めて AP コースを取った学生が入ってきたため、サンプル数は非常に小さい。なるべく多くの学生からの情報を得るために AP コースを取り中級のレベルに振り分けられた学生3人の他に、AP コースを取らなかったが、中級のクラスに振り分けられた学生2人、高校で何年か日本語を勉強したが、中級のレベルに達しなかった学生など、10人の学生と30分ほどの面談形式で情報を収集した。

2.2 AP コースに対しての学生からのフィードバック

表-1は2年生にクラス分けされた学生のバックグラウンドと AP コースへのコメント表にしたものである。AP コースに対して次の意見が共通点としてあげられる。

- ペースが早かった。
- 難しかった。
- 単語や漢字はよく勉強した。
- 文化や習慣など勉強できてよかった。
- 1年から3年までの日本語のクラスより、ずっとたくさん学んだ。

AP コースはそれまでのコースに比べ内容が充実しているとともに高度である。それがゆえに格段難易度が増すため、敬遠され学生数がそれまでのコースの半数以下になることが多いようである。

この他にカリキュラムがまだ定まっていないというコメントもあり、また AP が試行段階にあることがうかがわれる。また3校だけの比較でも分かるように、AP コースとは言え、学校ごとのカリキュラムの違いがかなりあることも認められる。学生1の場合、教諭が AP に非常に熱心で、地域の AP 講習やワークショップに積極的に参加していたということから、クラススケジュールがよく変わったとはいえ、クラス自体

はかなり満足のいくものだったようだ。学生1は、クラスでの発言量は少なかったが、非常に優秀な学生で、トップクラスの成績を収めた。

表-1. 2年生にクラス分けされた学生のバックグラウンドと AP コースへのコメント

学生	出身高校	AP 成績	授業	学生数	使用教科書	授業の内容
1	南部の 大きい 公立高校	AP 5	週5日	8人	Adventures in Japanese IV (used rarely) Handouts オンライン	漢字 文化/習慣 単語 文法 発表
コメント: - 難しいとの評判があり、レベル III から AP コースを続けたのは約半分 - AP のカリキュラムは日本語 I から III と大幅に違った。 - 2年目の AP コースを受けたが、1年目に比べずっとよくなった。それでもまだ試行錯誤の段階か、クラスのやり方がよく変わった。 - 最後の一ヶ月は AP exam の準備に集中。 - テストやクイズが頻繁に行われた。 - 先生は AP に非常に熱心だった。 - Speaking の練習は主に Giving announcements 日本についてのショートスピーチ (トピックはポップカルチャーなど。) 友達に電話 敬語を使った会話 - I から III のレベルより、クラスで日本語を使う量が多かった。 - Learn more contextually/ more content based (例: 日本の家について習う。単語、漢字、文化・習慣を勉強する。)						
2	西海岸の 大きい 公立高校	AP 5	週5日	12人	Adventures in Japanese III (2/3を終えた) Handouts 文化 桃太郎 文法 漢字 オンライン	単語 文化 聴解 speaking 文法
コメント: - 初めての AP コースだったので、先生もどのように AP exam の準備をしたらいいかわからないようだった。 - 難しいとの評判があり、2年目には AP コースを取ったのは6人だけだと聞いた。 - よくクラス内容に変更があった						

3	西海岸の 小さい 私立高校	n.a.	週4日	6人	教科書なし、 Handoutsのみ	漢字 発表 聴解 文法 スピーチ
<p>コメント:</p> <ul style="list-style-type: none"> — 私たちの高校での初めての AP コースだった。 — 試験のストレスがない方が自由に勉強できると思ったので、<u>AP exam</u>は取らなかった。 — AP のコースはそれまでのコースよりずっと難しかった。 — AP のコースはそれまでのコースより構成がしっかりしていた。 — AP 5 がとれたのは日系の学生だけだった。ほとんどの学生の成績は AP 2 または 3 だった。 						

次の表は、AP の日本語コースはなかったが、オファーされた全ての日本語を高校で取り、ブラウン大学の中級レベルを終了した学生のバックグラウンドとコメントをまとめたものである。(学生4は昨年、学生5は2年前に中級コースを取った。)

表-2. 2年生にクラス分けされた学生のバックグラウンドと高校のコース (non-AP) へのコメント

学生	出身高校	授業	学生数	使用教科書	授業の内容
4	西海岸の 大きい 公立高校)	週5日	20/30人	Learn Japanese: New College Text Vol. I and II (現在は「げんき」使用)	スピーチ 文法
<p>コメント:</p> <ul style="list-style-type: none"> — AP コースなし。AP exam を取りたい人は先生が授業の後で少し教えてくれていたようだ。 — 大きいクラスで学生のレベルの差があった。 — AP コースがあったら取りたかった。上のコースを取りたかったから。 (日本語のクラスは9年と10年のみ) — 漢字や文化はあまり勉強しなかった。 					
5	東海岸の 大きい 公立高校	週5日	25人 (日本語5の クラス)	Nakama I and II 中級の日本語 (L.1 – L.2+)	漢字 文法
<p>コメント:</p> <ul style="list-style-type: none"> — AP コースは卒業した翌年から。 (*この学生が取ったコースは AP コースの前身) — 文化はほとんど教科書に出てきたもののみ。 — Speaking はあまり重要視されなかった。 					

学生4の場合は11年生、12年生では学校で外国語がオファーされていず、勉強を続けたくともできないという例である。いくら優秀でも大学に行くまでに時間がだいぶあいてしまうため、プレースメント・テストの結果1年生のクラスに入れられる学生はこのカテゴリーに多いのではないだろうか。学生4は、秋学期は **advanced beginner** のクラスに振り分けられたのだが、スケジュールが合わなかったため、春学期は中級レベルに入れた例外のケースである。この学生は努力家であり、韓国系の学生であったこともあり成績はよかった。学生5の場合は5年のレベルまでコースがあり、それもかなりインテンシブなコースであったようだ。しかしながら、カリキュラムに偏りがあったようで、学生5はスキル上の得手不得手が非常にはっきりと分かれていた。

これらは文字通り1例にしか過ぎないが、4年生にオファーされる **AP** コースは大学で日本語の勉強を継続することを希望している学生にとってはカリキュラムの面からも、継続性の面からも望ましいことの例証になり得るのではないかと思う。

2.3 高校と大学の日本語授業の比較

ブラウン大学では現在初級コースは週5日、時間数約5時間(1年で約140時間)、中級コースは週5日、時間数約4.2時間(1年で約110時間)の学習時間が割り当てられている。初級コースは担当教師自作の教科書、中級コースでは三浦・マグロイン著の「中級の日本語」を使用しており、1年間で、ほぼ全課を終了する。(参考までに、上級コースは中級コースと同じ時間数で、「待遇表現 (Formal Expressions for Japanese Interaction)」、「新聞で学ぶ日本語」、「テーマ別上級で学ぶ日本語」の3冊を使用している。)今回面談したほとんどの学生の高校での授業時間数も週5日、数約4.2時間であり、ブラウン大学中級、上級コースの授業時間数と差異はない。

学生による高校と大学の日本語コースの比較をまとめたものが次の表である。学生が共通して感じていることは、大学の授業が進むペースがかなり速いこと、授業の密度が濃いこと、そして勉強量が多いことだと言える。また、大学ではクラス内外で、日本語で話すことが要求されること、文法も高度となり、正確なアプリケーションが要求されることなど内容的にも差が存在することが学生とのインタビューで分かったことがらである。下の表には **advanced beginner** の学生も含まれている。

表-3. 学生による高校と大学の日本語コースの比較

<p>学生1</p>
<ul style="list-style-type: none"> ➤ 高校の時にクラスを見に来て、中級が自分に合ったクラスだと思っていた。 ➤ ペースが速い。 ➤ クラスは厳しい。 ➤ 大学の1年間は高校の4年間に相当するようだ。高校でゆっくり勉強できて良かった。 ➤ 高校で習うよりも大学ではカバーする文法項目が多い。 ➤ 大学のクラスではほとんど先生も学生も日本語で話す。 ➤ 一年生であったので、始めは2年生に囲まれたクラスで少々居心地が悪かった。
<p>学生2</p>
<ul style="list-style-type: none"> ➤ 高校で4年間勉強したので、中級は易しいと思ったけれど、そうではなかった。高校の3年と4年のクラスは大学の一年に相当すると思う。 ➤ ペースが速い。 ➤ 高校は英語を使うことが多かった。 ➤ 大学のクラスは高校と違って、学生が先生の言うことに注意を向けていないとすぐに今何をしているか分からなくなってしまう。 ➤ 大学の日本語の文法や単語はずっと複雑だ。 ➤ 大学では学生が、皆非常にモチベーションが高く、よく勉強する。 ➤ 学校に入りたての時は、全てが新しく、慣れるのに大変だった。日本語のクラスでも勉強をどうしていいかなど、分からないことが多かった。
<p>学生3</p>
<ul style="list-style-type: none"> ➤ ゆっくりと勉強できることが高校で勉強する1つの大きな利点だ。大学はずっと速い。 ➤ 大学のコースの方がコースの構成がしっかりしているし、変更が少ないので、勉強の準備がしやすい。 ➤ 高校で基本的な文法をきちんと勉強しなかった。使い方をあまり練習しなかった。文法は知っていたが、使い方が分からなかった。質問しても詳しく説明してもらえなかったし、同じ誤りを繰り返して癖になってしまった。 ➤ 文法はとても大切だ。文法なしでは話すことはできない。大学のコースを取って、自分に何を重点的に勉強しなければならないかがわかった。
<p>学生4</p>
<ul style="list-style-type: none"> ➤ 高校での2年間の日本語は大学の1年間に相当すると言われたが、そうではなかった。 ➤ 大学のペースはずっと速い。 ➤ 高校では基礎を、大学ではより深く学ぶ。

学生 5
<ul style="list-style-type: none"> ▶ 高校のクラスは易しいし、先生も厳しくない。あまり厳しくすると学生がやめてしまうので、厳しくできないのだと思う。 ▶ 高校4年の時にクラスを見に来て、中級に多分ブレースされると思った。実際に中級のコースに入ってみて、すんなりと授業についていけた。高校で習ったことがほとんど全部正しかったので、うれしかった
学生 6
<ul style="list-style-type: none"> ▶ 大学のペースはずっと速い。 ▶ 高校では学生も先生も英語をよく使った。
学生 7
<ul style="list-style-type: none"> ▶ 大学のペースはずっと速いし、徹底している。勉強量が多い。 ▶ 高校で3年間日本語を勉強したが、大学で中級に入れないと自分でも思っていた。

2.4 一大学教師からのフィードバック

以上、2項目に渡って学生のフィードバックをみてきたが、ここで私の観察と意見を述べたいと思う。確かに AP コースを取り一生懸命勉強し、AP exam で成績 5 を取った学生は優秀である。ちなみにブラウンでの成績は、学生1が A (19 人中3番め)、学生2も A (19 人中5番め)であった。学生3は AP exam は受けていなかったが、ブラウンでの成績は B であった。成績に関係なく、この3人に共通して言えることは単語の使い方が巧みなこと、文化の知識も豊富で、日本のことをよく知っているし、日本に対する興味も高い。日本語に慣れているという印象を強く受けた。これは時間をかけて学んできたことが大きく寄与していると私はみている。反面、これは A の成績を取った学生にも言えることなのだが、文法の正確さに欠けていることが他の面で優れていることと対照的に目立った。特に、学生3の場合は誤りのかなり化石化してしまっていた。基本的な動詞、形容詞の活用、助詞の使い分けの誤りが中でも一番目立った。これは高校で日本語を勉強した学生の特質では、勿論ないのだが、他の面では優秀であるからこそ、アンバランスに強調されてしまう。

その原因は何かは推測の域を出ないのだが、今回の学生の話聞きながら、AP コース以前のコースで学習したときに起ってしまった化石化が一つの原因になっている可能性があるのではないかと考えている。高校1年から3年と AP コースの繋がりも踏まえて、この点について、高校の先生がたのご意見を聞きたいと思う。

ちなみに、この文法の問題は継承学習者のケースに似ていると思っている。私は2年生のレベルの他に4年生のレベルと上級レベルのビジネス日本語も教えているが、継承学習者で、かなり話しもできる

し、読めるので、3年生のレベルに入れられることが多いのだが、こういう学生に限って、文法の知識が足りず、3年生のレベルを取る段で学生の方から、どうしたらいいかと相談に来たケースも過去何件かある。4年生のレベルを教えていて、やはり **accuracy** は重要視したいと思っている。決して文法偏重の教授法への逆戻りを奨励しているのではない。文法の教授法には様々な方法があるが、究極的には正確に文法を使いこなすことが円滑、かつ意味のあるコミュニケーションにつながると信じている。

もう1点、ここで触れたいのは、プレースメントに対して高校側の目標設定と大学での実際のプレースメントにはギャップがあり得るということである。大学1年生は秋学期にはほとんどまだ、高校生、2学期目でかなり落ち着いてくるということで、個人差もあろうが、2年生や3年生の中で勉強するのは精神的な負担がかかるのではないかと思う。**AP** は大学の3年生のコースに入れることを目標にしているようだが、この点にも留意が必要かではないかというのが私見である。

3. 今後の課題

AP コースはそれ以前のレベルの日本語のコースに比べカリキュラムが充実している。しかしながら、実際にカリキュラムに沿って効率的に教えるためにはスキルを養う訓練が必要であり、**AP** コースをオファーする学校が増えるに従って、どのように教師を養成して行くかは高校側の今後の課題であると思う。また、すでになされている高校もあると思うが、**AP** コース以前のレベルの日本語のコースとの **articulation** を見直し、ギャップを埋めて行くこともこれからの課題ではないのだろうか。大学教師も **AP** コースの長所を認識し、自らのカリキュラムの見直しをすることも考えて行かなければならないと感じた。授業のペースが速いと言うことは何かを犠牲にしているわけで、今後の日本語プログラムの目標設定を考察する良い機会であると思う。

今回の面談式の調査は始めにも述べたが、サンプル数が小さい上、ブラウン大学の学生に限られているため、これから一般論を引き出すことは本稿の目的ではない。しかし、このような一大学、または地域ごとのフィードバックと意見の交換が今後の高校、大学の縦の **articulation** に繋がっていくと考える。**AP** を含めた高校で日本語学習した学生を大学でどのように伸ばしていくかを共に考える連携体制の確立が高校並びに大学で日本語教育に携わっている教師にとって大きな関心事の一つである。**AP** がまだ初期の段階にあり、**AP** をどう「繋げ役」として成功させるかが日本語教師に課せられた今後の課題であり、効率的なコミュニケーション手段の確立が望まれる。

4. さいごに

今回の学生との面談で、いかに高校の先生方が長時間、4レベルを数多くの学生に教えていらっしゃるかが分かり、ほんとうに頭が下がる思いであった。どの学生も自分たちの先生がいかに献身的か語っていた。これからも頑張っていたきたいと思う。